



TITLE:

戸帖考補遺

AUTHOR(S):

曾我部, 静雄

CITATION:

曾我部, 静雄. 戸帖考補遺. 東洋史研究 1950, 10(6): 485-485

ISSUE DATE:

1950-02-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/145870>

RIGHT:

が私の指摘したい要點であつた。次いでカムケラミーク發生地と推されるヴォルガ・オカ兩河地方の場合に於いても、同様の事實を認め得たのであるが、殊にオカ河流域に於いては、遺跡立地が水邊の砂丘地に選擇されたことをも知ることができた。私の指摘したい第二の點である。何故ならば既に述べて來た様に、カムケラミークの分布が北方ユーラシアの廣大な森林地帯とほぼ一致することは、その波及が河川組織を中心として湖沼岸或ひは海岸等の水邊に沿うてであることを推測せしめるからである。然しかやうにして東部シベリヤにまで波及したカムケラミークは、依然として本來の傳統を存続せしめつつはあつたが、むしろローカルな異質文化に包攝されるほど主導力の弱まつたものであつた。これが指摘さるべき第三の點である。

私の論すべき問題は實はこれからなのである。私の實際に見聞し得るカムケラミークは、滿蒙のそれであり、朝鮮のそれであり、更には日本の所謂「田戸式」土器である。私にとつては從來云々されたカムケラミークが、その形式としての概念は極めてあいまいであ

つたが故に、本來のカムケラミークの形式が眞に如何なるものであるかを把握せんための一助として、先づこの一文を草したのである。(二三・一一・一五)

戸帖考補遺

曾我部靜雄

私は本誌第十卷第三號に、戸帖についての一文を載せ、その中で元時代に戸帖があつたか否かは知らないと述べて置いた。然るにその後元典章を閲讀した所、同書の中に戸帖についての一記事のあることを發見した。それは卷十七、戸部三、異性承繼立戸の條に、

今次追到萬洪戸帖。查照、與各人所供相同、

とあることで、これは萬洪なるものの後繼者についての争ひに現はれてゐる戸帖であつて、これは明に家に藏してゐた戸籍謄本の如きものと思はれる。明時代には全く戸帖は戸籍謄本、門牌の如きものになつてゐたが、それは既に元時代からであつたことを知り得るのである。

昭和二十四年十月二日稿了